Japanese Association of Russian Scholars

ロシア語ロシア文学研究 34（日本ロシア文学会，2002）

ネクラーソフ論文「ロシアの二流詩人たち」をめぐって

── 詩論のなかのチュッチェフ ──

坂　庭　淳　史

序

1850年，ネクラーソフは雑誌『同時代人』において，論文「ロシアの二流詩人たちРусские второстепенные поэты」を発表した。この論文で取り上げられたのが，当時はほとんど無名であった詩人Ф.Т.（チュッチェフ）の作品であった。チュッチェフの詩は1836年にプーシキン主宰の雑誌『同時代人』に掲載されたが，大きな反響もなくその後は忘れ去られ，1840年代には彼はほとんど詩を書いていなかった。ロシア象徴主義の先駆者であるメレシコフスキーが「チュッチェフを偉大な詩人として最初に語ったのはネクラーソフであった」[1]と述べているように，ネクラーソフの論文はチュッチェフを忘却の闇からロシア詩の世界へ呼び戻した。チュッチェフの詩はプーシキンやレールモントフといった一流のロシア詩人たちと同等に高く評価され，1854年には初の詩集が発刊されたのである。

チュッチェフ（1803-1873）とネクラーソフ（1821-1878）は19世紀，特に，プーシキンやレールモントフ以後のロシア詩を代表する詩人である。メレシコフスキーは，この二人のロシア詩人を月と太陽にたとえ，ロシア詩における両極としている。以降も「チュッチェフとネクラーソフ」というテーマでは，さまざまな研究がなされてきているが，論文「ロシアの二流詩人たち」については十分な考察がなされていないように思われる。本論考では，ネクラーソフがチュッチェフの作品を芸術的に率直に高く評価していたという事実を軽視することなく，「なぜネクラーソフがチュッチェフに注目したのか」という問題を中心に，ネクラーソフの論文「ロシアの二流詩人たち」の新たな読み方を提示する。そして，この論文の意義，チュッチェフのロシア詩における位置について，これまでの研究のあり方を批判しつつ考察していく。

1.「チュッチェフとネクラーソフ」についての先行研究

はじめに「チュッチェフとネクラーソフ」についての先行研究を概観しておく。これまでにも，例えば1850年代におけるネクラーソフの詩の言葉や自然描写がチュッチェフに接近していること，[2] チュッチェフの作品にはなかったナロードの問題が1850年代以降に現れたこと[3]など，二人の影響関係が言及されてきている。また，二人の詩人を結びつける最も大きな共通点といえば恋愛詩である。ネクラーソフとチュッチェフにはそれぞれ当時の愛する女性をモチーフにして書かれた作品群がある。長編小説へのプロセスともなる，いわゆるнесобранный циклの登場は19世紀中頃のロシア詩の特徴と言えるが，1850年代から1860年代に書かれたこれら二つの作品群こそその代表である。どちらの恋愛詩においても確かな存在感を持ったヒロインが登場するが，これらの作品群を含めて，二人の詩人が当時のロシア女性たちの苦悩を主題としていること[4]もまた指摘されている。

もちろん，これらの先行研究とテーマの重要さは否定できない。しかし，いずれの場合も「1850年以降」に書かれた二人の作品についての考察である。まさに，二人の詩的世界が出会った端緒であるネクラーソフの論文「ロシアの二流詩人たち」（執筆は1849年）については，「チュッチェフを偉大な詩人として最初に語った」点においてその意義が軽視されることはなかったが，「なぜネクラーソフがチュッチェフに注目したのか」という問題を含めて，ネクラーソフの論文の内容，あるいはその執筆意図については，十分な考察がなされていないように思われる。

2. 論文「ロシアの二流詩人たち」── 読解のための問題設定

ネクラーソフの論文「ロシアの二流詩人たち」[5]は，彼が編集していた雑誌『同時代人』の1850年1号に掲載された。ネクラーソフの署名ではないが，同じく

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

「ロシアの二流詩人たち」と題されたオガリョフ，フェート，ヴェネヴィチノフについての論文が『同時代人』の以降の号に続けて発表されている。表題にある「二流」とは，詩人としての認知度が低いことを意味している。

この論文には，二つの主題がある。第一の主題は，ロシアの文壇において冷めてしまった詩への関心を呼び起こすことである。この論文は「詩は存在しない」〔11-2,32〕という言葉から始まっている。プーシキンとレールモントフが亡くなった後の1840年代はロシア詩の一時的な空白期間であり，詩に代わって散文が台頭してくる時代であるが，『同時代人』各号の目次にある「文学 словесность」の欄の変遷を見ても，1847年の7号ではそれまで存在していた「散文 проза」，「詩 стихотворение」という下位区分がなくなり，「文学」欄は散文だけで構成されるようになる。こうした状態を3年近くも経て『同時代人』誌上に登場したこの論文は，ロシア詩の新たな時代の到来を告げる一大キャンペーンの意味合いを帯びていた。

第二の主題は，忘却の闇に埋れた詩人チュッチェフの創作に光をあてることであった。チュッチェフの詩はプーシキン時代の『同時代人』に1836年から1840年にかけてΦ.T. の署名で掲載されており，ネクラーソフはその全32篇のうち24篇を論文中で引用している。詩の作者は「Φ.T.」というイニシャルのままで扱われ，チュッチェフという名前は出てこない。ネクラーソフにとって，プーシキン時代の「『同時代人』のテクストがチュッチェフの創作を知るための唯一の情報源」[6]であり，詩の作者が何者であるか，この当時ネクラーソフ自身も分かっていなかったようだ。

このように論文「ロシアの二流詩人たち」には二つの主題がある。しかし，「詩への関心を呼び起こす」（第一の主題）ために，当時ほとんど無名であったチュッチェフの作品を取り上げること（第二の主題）が適当であったろうか。チュッチェフをロシア詩の興隆という焦眉の問題のために最初に取り上げた背景には，これまで言及されてきていない，二つの主題を結びつけるネクラーソフの特別な「意図」があるように思えてならない。

3．論文「ロシアの二流詩人たち」の内容（前半部分への着目）

次に論文「ロシアの二流詩人たち」の内容について考えていきたい。まず，先行研究との関係から，論文の冒頭にある目次に注目する必要がある。目次は，

「ロシア詩の現況。『同時代人』編集部に送られてくる詩について。そのうちの数篇。オガリョフの新しい2篇の詩。T.Л. の詩。**Φ.T. 氏と彼の詩（1836-1840）**」〔11-2，32〕（強調は引用者）となっている。

目次から分かるように，論文の前半部分には，チュッチェフ以外のロシアの詩や詩人についてのくだりがある。「ロシアの二流詩人たち」シリーズの第一回であったこともあるが，オガリョフやフェート，ヴェネヴィチノフについての諸論文は各詩人の作品論，作家論になっておりこうした前書きは付されていない。つまり，この論文はチュッチェフ「だけ」を論じているわけではないのである。しかし，論文がチュッチェフに対するロシア初の批評であること，そして，「当時の人々はこの論文をチュッチェフ論として考えていた」〔11-2，315〕というチュコフスキーの記述などがあるためか，ネクラーソフがチュッチェフの詩につけた解説や解釈の部分のみがこれまで注目されてきた。この論文を「批評家ネクラーソフの最高の成果」[7]と位置づけ，論文全体を総合的にとらえたマンのような考察を除けば，論文の前半部分には全くと言っていいほど注意が向けられてこなかったのである。

ここで前半部分の内容を，論文の目次を追いながら見ていきたい。「ロシア詩の現況」では，プーシキン，レールモントフの時代に詩の言葉や形式がすでに高いレベルで完成してしまっていること，収入面で散文が有利なこと，そのため詩才のある人でも散文に傾斜して詩が書けなくなってしまうことなど，現在詩が廃れてしまった理由が挙げられている。そしてベストゥージェフ＝マルリンスキーやベネディクトフの時期を例にしながら，内容を犠牲にして形式を第一に考える現代の詩の傾向が「装飾性 вычурность」という言葉で表現されている。また，ネクラーソフは，言葉と形式が完成されたために模倣が氾濫し，「独自性 самобытность」が欠如していることを指摘し，『同時代人』編集部に送られてきたスピグラーゾフとソロニーツィンという二人の詩人の作品をその例として紹介する。続いて，編集部に現在ある価値のある作品として，オガリョフの2篇とT.Л.（ツルゲーネフのペンネーム）の詩を読者に示している。

そして，ネクラーソフはプーシキン，ジュコフスキー，クルイローフ，レールモントフ，コリツォフという前世代の偉大な詩人の名を挙げた上で，詩人Φ.T.（チュッチェフ）への言及を始めている。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

4. 詩「秋の夕べ」に関するネクラーソフの解釈

論文「ロシアの二流詩人たち」の前半部分の意味を考える上で，もうひとつの興味深い点を指摘しておきたい。それは，論文に引用されているチュッチェフの24篇の中でも，ネクラーソフは詩「秋の夕べ Осенний вечер」(1830) について強い関心を示しているように思われることである。引用したのみで特に言及を加えていない作品もいくつかある一方で，この作品にはネクラーソフの独自な解釈が添えられている。以降は，チュッチェフの詩「秋の夕べ」とネクラーソフによる解釈を中心に据えながら，序に示した「なぜネクラーソフがチュッチェフに注目したのか」という問題について考察していく。

ネクラーソフは詩人 Ф.Т. の詩がプーシキン時代の『同時代人』に掲載された経緯を述べながらチュッチェフの作品を順に示していくが，5番目にあるのが詩「秋の夕べ」である。

Есть в светлости осенних вечеров
Умильная, таинственная прелесть:
Зловещий блеск и пестрота дерев,
Багряных листьев томный, легкий шелест,
Туманная и тихая лазурь
Над грустно-сиротеющей землею,
И — как предчувствие сходящих бурь —
Порывистый, холодный ветр порою,
Ущерб, изнеможенье, и на всем
Та кроткая улыбка увяданья,
Что в существе разумном мы зовем
Возвышенной стыдливостью страданья.

秋の夕べの光には
いとおしい，なぞめいた魅力がある。
不吉な輝きと，彩とりどりの木々
紅蓮の葉の，物憂げで，微かな葉ずれ
悲しく寄辺ない大地の上に
かすみ立つ，静かな碧空。
嵐の近づきを告げるかのように
冷たい突風が吹く
欠如，困憊，そしてすべてに
凋落のおだやかな微笑みがある
それを私たちは，理知ある人間の中の，
苦悩のけだかきはにかみと呼ぶ。

ネクラーソフはチュッチェフの詩全体を「思想のない情景」，「思想の付属した情景」，「ハイネを髣髴させるアイロニー」，「思想を中心とする作品」の4つに分類しながら提示していくが，なかでも「思想のない情景」については全体の三分の一にあたる8篇を引用し，「Ф.Т. 氏の詩の最大の長所とは，生き生きとした，優雅な，造形的に精確な自然描写にある。〈…〉詩的作品において最も難しいもの，それは，いかなる内容も，いかなる思想も無いように見える作品である。詩に現れた風景，2，3の特徴で表される小さな情景である」〔11-2，46〕[8] と述べ最も高く評価している。そして，ネクラーソフは「思想のない情景」の8篇の中でも詩「秋の夕べ」に関してだけ，「主観的な感覚のモーメントを加えている，言い換えるならば，解釈者として登場」[9] している。以下にネクラーソフの解釈を示すこととする。

> とびきりの描写だ！　不意に強く吹きつけてくる秋の風が胸を打つように，各行が胸を打つ。聞くのは苦しいが，聞くのをやめるのもまたつらい。この詩を読んで受ける印象をたとえることができるとすれば，人が，愛する，**瀕死の若い女性**の枕もとで覚える感情であろう。力強い独自の才能を持つ者だけが，人間の心の中にあるこのような琴線に触れることができるのである。それゆえ，我々はなんら躊躇することなく，Ф.Т. 氏をレールモントフと同列に置く。彼がごくわずかしか詩を書いていないのが残念だ。この詩の各行が，わが国の偉大な詩人たちのうちの誰にも引けを取らない傑作である。この詩の芸術的価値については言うまでもない〔11-2，48〕(強調は引用者)

秋の凋落する自然の中に瀕死の女性の姿を見出したこの解釈はきわめて特徴的であり，現在のチュッチェフ詩集の注釈でもしばしば引用されている。しかし，この解釈をチュッチェフの実際の創作と照らし合わせてみると，それまでのチュッチェフの詩的世界にはこのような「瀕死の女性」が登場するような作品は見当たらない。また，「思想のない情景」に分類された他の7篇に関しては率直に「精確な自然描写」について言及しているだけに，詩「秋の夕べ」の解釈の特異さが一層強く感じられるのである。

先行研究では，1830年に書かれた詩「秋の夕べ」は1850-1860年代，つまりネクラーソフの論文発表後のチュッチェフの作品に現れてくる「女性」の描写と合わせて理解され，チュッチェフの創作後期（1850-1860年代）を予感させる詩とされているが，こうした考えの根底にあるのがネクラーソフの解釈である。こうした考えの代表的な論者であるコージノフはこの解釈に触れ，「ネクラーソフはチュッチェフの創作の新たな方向性をまるで予知したかのようだ」[10] として，ネクラーソフの慧眼と論文「ロシアの二流詩人たち」の意義を指摘している。確かに，チュッチェフは1850年代から1860年代にかけての自伝的な作品群

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

「デニーシエヴァ・シリーズ」[11]において，こうした「女性」を描くようになる。例えば，詩「言わないで，彼が私を昔のように愛しているとHe говори: меня он, как и прежде, любит...」(1851-52) には，女性の独白形式を用いた，愛の中で苦悩する女性の精確な心理描写があり，詩「彼女は一日中，意識がなかったВесь день она лежала в забытьи...」(1864) では，主人公はまさに愛する女性の死の際に立ち会うことになる。

ここで「チュッチェフがはたしてネクラーソフの論文を読んでいたのか」という問題が生じてくる。実際の書簡などを見る限りでは，チュッチェフが論文を読んだことの証拠となるものは見当たらない。コージノフは「50年代初頭，チュッチェフはネクラーソフを，誰も知らないФ.Т. の詩に対して深い敬意を示した『同時代人』の発行人としてだけ受けとめていた」[12]と，ややあいまいに記すにとどめている。こうした考え方は，我々も含めてチュッチェフの後期作品を知っている者の言説であり，文学史をさかのぼる視座から見えてくるものである。コージノフのこの言及もやや弱いものと言わざるを得ないだろう。

本論考では，そうした20世紀，21世紀からの視点ではなく，ネクラーソフの論文で提示されたチュッチェフの作品を同時代人たちがどのように受けとめていたのかを考えてみたい。当時のチュッチェフは全くの無名詩人であったと言える。『同時代人』の編集者となったネクラーソフ自身が作者についての情報を持っていなかったように，多くの読者はネクラーソフの論文で示された情報のみによって「Ф.Т. とはいかなる詩人か」を考えていたはずである。そうした点から，ネクラーソフによる詩「秋の夕べ」の解釈の新たな見方を提示していく。

5．ネクラーソフによる詩「秋の夕べ」の変更点

論文「ロシアの二流詩人たち」における詩「秋の夕べ」には，他にも注目すべき問題が含まれている。詩の一部が変更されているのだ。プーシキン時代の『同時代人』からチュッチェフの作品を転用する際，ネクラーソフはいく篇かの詩に若干の変更を加えている。「秋の夕べ」もそのひとつであり，詩の最終行の，「神のбожественной」が「けだかきвозвышенной」に変更された。[13]「神のбожественный」という言葉は，詩「閃光Проблеск」(1825) や「暑苦しい沈黙のなかでВ душном воздуха молчанье...」(1835) でも用いられているが，いずれも自然の中に漂う神の要素を伝えており，チュッチェフの詩作品のキーワードの一つである。付け加えるならば，「けだかきвозвышенный」はチュッチェフの詩ではいちども用いられることがなかった。

現在ではバリアントとして扱われているこの変更について，研究者たちは何らかの違和感を覚えている。たとえばゴレーロフは「ネクラーソフは最後の，かつ最も重要な詩行を軽率に変更している。この行にあるбожественнойをвозвышенной に変えているのだ。〈…〉この言葉の特殊な意味，より正確に言えば，その『神の』という外見が，ネクラーソフを不快にさせたのかもしれない。詩のコンテクストにおいては，この言葉は完全に宗教的な内容を失っているのに」[14]と，また，ニコラーエフは検閲に配慮してбожественнойという言葉を変更する必要があったことを[15]指摘している。たしかに，当時は「検閲のテロル」と呼ばれる時期であり，H.H. アンネンコフを委員長とする「1848年4月2日委員会」と国民教育省が皇帝ニコライ1世の支持のもとに熾烈な検閲を展開していた。特に宗教的な世界観に関しては「聖書の中で言われていることだけが正しく，ゆるぎない」[16]という信条に基づいて異常なまでに厳しいチェックがなされ，学術論文でさえも発行禁止にされることがあった。委員会はそれまでの検閲規約に反して，作品中の副次的な，秘められた意味をも読み取るようになり，正教会の思想に反するものは徹底的に検閲の網に取り込まれていた。したがって，ネクラーソフが検閲を意識して語句を変更したことも十分類推可能である。

しかし一方で，チュッチェフ研究の第一人者であるピガリョフがこの変更について「何を指針としたのか全くわからない」[17]と述べていることにも注目したい。検閲だけでない，あらたな変更の意図を考察する余地があるだろう。はたしてネクラーソフの変更はゴレーロフの言うように軽率だったのだろうか。翻って，言葉の変更がなかった場合を考えると，こうした独自の解釈は成り立ち得ないように思える。つまり，ゴレーロフが「最も重要な詩行」と呼んでいるように，「神のбожественной」という言葉はチュッチェフが持っていた汎神論的な世界観をさらに強めており，「けだかきвозвышенной」というやや中立的な言葉にネクラーソフが変更したことで，読者に与える詩のイメージは大きく変化しているはずなのである。

6．論文の前半部分と詩「秋の夕べ」の関係 ── 読者への作用

詩「秋の夕べ」の変更の意図を考え始めると，3で

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

示した論文「ロシアの二流詩人たち」の前半部分，とりわけ，引用されていた他の詩人の作品が意味を持ってくる。前述した通り，これまで前半部分はチュッチェフの詩とあわせて考えられてはこなかった。だが，この前半部分のあとに詩「秋の夕べ」およびその解釈を示す（つまり，読者にとっては，論文を最初から読み進めてくる）ことで，ネクラーソフは『同時代人』の読者にある特殊な効果を与えているように思える。以下では，詳細に論文の前半部分，特に他の詩人の作品について考察していく。

論文の最初に「独自性 самобытность」が欠如したものとして紹介されたスピグラーゾフの2篇の詩は，どちらも恋愛詩である。第一篇では，どこからともなく聞こえてくる，亡くなった恋人の嘆きを耳にした男性主人公が，かつての愛における自身の振る舞いを後悔しており，第二篇では，小鳥のように無邪気だった娘が，金持ちと結婚して一見豪華な生活を送りながらも実は「心に深く，悲しみを秘している」という筋が仕事に疲れた娘の母を交えて描かれている。そして，この二篇の詩についてネクラーソフは「プーシキンと，雑誌や作品集にいく篇かの詩を発表したが，今では詩を書いていないある作者の影響がかなり明白に見られる」〔11-2，39〕と解説している。チュコフスキーの注釈によれば，この「ある作者」とは，1848年から1849年にかけて詩を発表していなかったネクラーソフ自身を暗示している〔11-2，318〕。確かにスピグラーゾフの詩に見られるようなテーマは，ネクラーソフがそのころに書いていた詩「道徳的な人 Нравственный человек」（1847）や「夜の暗い通りを行き Еду ли ночью по улице темной...」（1847）などに通ずるものがある。詩「道徳的な人」〔1，58〕の第一連では主人公に秘せる恋を暴かれて「病の床につき/恥と悲しみに引き裂かれ，死んでいった」妻が描かれ，第二連では「金持ちの老人へ嫁ぎ」，その後悲しみにくれ，「肺病で死んでいく」娘が描かれている。

このモチーフは，論文の前半部分で引用されたほとんどすべての詩の中に見つけることができる。オガリョフの詩「運命 Fatum」では教会にいる主人公が二つの棺を見つけ，夫を失った妻子の悲しみ，子を失った両親の悲しみ，というそれぞれの棺にまつわる物語があり，詩「忘れられて Забыто」ではかつての恋人に「目線をそらして」「何も言わずに」「通りすぎて」行かれた，忘れられた女性が主人公となっている。詩人 Т.Л.（ツルゲーネフ）の詩「ひとり，また私はひとりになった Один, опять один я. Разошлась...」では，眠れない主人公の脳裏に次々と思い出が浮かぶのだが，そのひとつにはだいぶ昔に私が忘れてしまった娘の悲しげな面影がある。

このように，死にとらわれた，あるいは悲しみにうちひしがれた女性というモチーフの一連の詩を紹介されたあとに，読者はチュッチェフの詩を読み，ネクラーソフの「人が，愛する，瀕死の若い女性の枕もとで覚える感情」という解釈を読むことになる。このとき読者には，それまでに紹介されてきた同時代の詩とチュッチェフの詩とのつながりが感じられるのではなかろうか。つまり，ネクラーソフの解釈にある「瀕死の女性」のイメージに促され，また божественной から возвышенной への変更の作用も手伝って，読者は本来汎神論的な自然が描かれていたチュッチェフの詩の中に，ネクラーソフを含めた同時代の詩人たち（オガリョフ，ツルゲーネフ，そしてスピグラーゾフらも含む）の作品と共通したテーマを感じ取るのである。

さらに考察を進めるために，論文「ロシアの二流詩人たち」を発表したころのネクラーソフについて述べておく必要がある。当時の彼は検閲によって創作の危機に陥っていた。ネクラーソフはパナーエフとともに1846年末に『同時代人』の出版権を手に入れたが，厳しい検閲の影響で自身の作品を全く発表できずにいた。ベリンスキーの遺言に従って，「街にて На улице」，「ぶどう酒 Вино」，「昨日の午後五時過ぎに Вчерашний день часу в шестом...」などの『市民』詩を書き続けていたネクラーソフは，それらの詩を原稿のままにとどめ，「検閲が発表を禁止するのがわかっていた」[18]ので検閲に送ろうとさえしなかった。また，論文の前半部分に取り上げられているオガリョフやツルゲーネフは当時のネクラーソフの文学仲間であり，特にオガリョフはネクラーソフの「直接の先駆」[19]とされ，どちらもネクラーソフの作風に近い詩人であった。こうした背景を考慮すると，自作の発表が困難であったネクラーソフが意図的に，あるいは検閲による変更の必要性を利用しながら詩「秋の夕べ」の言葉を変更し，オガリョフ，ツルゲーネフらの作品とイメージを重ね，そして，チュッチェフと自身たちの作品とのつながりを作り上げたのではないかと推測することが可能になってくる。ひとつの詩における言葉の変更を，論文全体の構成と照らし合わせながら考察することで，ネクラーソフによる言葉の変更が「軽率」なものでなくなり，そこには慎重さと巧妙さが見出せるのである。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

7. 詩「秋の夕べ」以降の詩とネクラーソフの解説

では，チュッチェフとネクラーソフ周辺の詩人たちとのつながりを作り出すことにどのような意味があるのだろうか。こうした意図があったと考えるならば，詩「秋の夕べ」以降の詩についてのネクラーソフの解説はさらに深い理解が可能となってくる。

詩「秋の夕べ」に続いてネクラーソフはチュッチェフの2篇の詩を引用するが，そのひとつである詩「春の流れ Весенние воды」をフェートの詩「春 Весна」と比較している。フェートの詩を部分的に賞賛しながら，ネクラーソフは一方で，「まずい数行によってこの詩の出来が悪くなっているのが残念だ。だが，フェート氏にはこの欠陥がかなり頻繁に見られる」〔11-2，50〕と述べている。そして，ここで指摘した2箇所の「まずい」詩行には，いずれも「装飾的 вычурный」という言葉を用いている。これは，論文の前半部分でネクラーソフが示した現代詩の欠陥のひとつである「装飾性 вычурность」という言葉と合わせて考えることができるだろう。付け加えるならば，詩「秋の夕べ」の解釈にあった「独自の самобытный 才能」という言葉もまた，現代詩についてネクラーソフが言及した「独自性 самобытность」の欠如と対応しているのである。

また，詩「秋の夕べ」の解釈において「我々はΦ.T. 氏をレールモントフと同列に置く。〈…〉この詩の各行が，わが国の偉大な詩人たちのうちの誰にも引けを取らない傑作である」と述べていたが，ネクラーソフは以降も，プーシキン，レールモントフ，ハイネなどを引き合いに出しながら，チュッチェフと彼らの作品の共通点を指摘していく。とりわけ，「我々が語ったΦ.T. 氏のすぐれた才能について，読者諸氏ももちろん賛同してくれるだろう。こうした詩をプーシキンが拒否しなかったのは疑いのないことだ」〔11-2，53〕というように，プーシキンがチュッチェフの才能を認めていたことについて，読者にもその確認を求めている。詩人チュッチェフ（1803-1873）とネクラーソフ（1821-1878）やフェート（1820-1892）との一番の違いは，後者2名が1840年代に詩作を本格的に始めたのに対し，チュッチェフはすでに1820年代には詩作を始めており，1837年の『同時代人』に作品を掲載されたように，まさにプーシキン（1799-1837）と同時代の詩人であったことである。つまり，ここでは，プーシキン，あるいはプーシキンらの時代とチュッチェフの結びつきが強調されているのである。こうした意図は，すでに論文の前半部分に垣間見られる。すなわち，スピグラーゾフの2篇の詩に，「プーシキン」と「ある作者（ネクラーソフ）」からの影響を指摘した時点で，ネクラーソフはスピグラーゾフの作風の批評を介して，自身とプーシキンの作風の近さを暗示していたのである。

これまでの考察から，序で示した「なぜネクラーソフがチュッチェフに注目したのか」という問題提起に対するひとつの回答を示しておきたい。

チュッチェフの作品についての考察を進めながら，ネクラーソフは自身やその周辺の詩人たちとの親近感を感じている。彼自身の作品を持ち出すことはできなかったが，周辺の詩人の同じような作風の作品と並置することによって，チュッチェフとのテーマのつながりを描き出している。そのうえで，チュッチェフの作品の批評を介して，ネクラーソフにとって現代詩のもうひとつの潮流であるフェートらと一線を画し，かつプーシキンやレールモントフの時代と自分たちの詩を結びつけるよすがとしてチュッチェフを見出したと考えることができるのではないだろうか。

8. 論文「ロシアの二流詩人たち」の意義・チュッチェフのロシア詩における位置

最後に，論文「ロシアの二流詩人たち」の意義と，この論文を読み解くことによって見えてくる，チュッチェフのロシア詩における位置について考えてみたい。文学史の流れの中に位置づけようとする場合，4で述べたように，この論文はチュッチェフの1850，1860年代の作品と関連付けられ，論拠の弱さはあるものの，以降のロシア詩の展開を予言的に見渡すような「現在（1850年）から未来へ向けて」の方向性が言及されてきた。

本論考では考察の対象を詩「秋の夕べ」とネクラーソフの解釈に絞り，そこから論文全体を見渡したが，そこにはチュッチェフとネクラーソフ自身の詩を結びつけること，さらにチュッチェフの詩を通してネクラーソフ自身の詩とプーシキン時代の詩をつなげるという意図が存在するように思える。チュッチェフの詩に見られた1830年代の「瀕死の女性」像は，まず論文執筆当時のネクラーソフ自身の詩と結びついているのである。ネクラーソフの視線はこれまで言及されてきたのとは反対方向，つまり「現在（1850年，ネクラーソフ周辺の詩）から過去（1830年代のチュッ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

チェフの詩，プーシキン時代の詩)」の詩を結ぶ方向に向かっているのである。

さて，1840年代にはほとんど詩作していなかったとはいえ，チュッチェフの50年（1820年代から1870年代）にわたる創作にはかなり広い振幅がある。これまでにも「ロシア文学のロマン主義からリアリズムへの大きな動きに対応している」，[20] あるいはより詳細に「創作方法そのものは，初期の習作期である理性的な『カラムジン主義』に始まって，1820-1830年代の『モスクワ派』のロマン主義を通過し，1850-1860年代のリアリズムの抒情詩へと発展していった」[21] という指摘がある。そして，まさにその発展の契機のひとつとなっているのが1850年のネクラーソフの論文，特に今回取り上げた「秋の夕べ」に関する解釈であった。この解釈のなかには，ロマン主義，自然派，リアリズムというロシア文学の大きな流れが交差している。1850年というロシア詩の転換点を示している点でロシア文学史においても意義深い論文と言えるだろう。

また本論考では，ネクラーソフがチュッチェフを引き合いに出しながらフェートの欠陥を論じている部分を指摘したが，一方でフェートは論文「チュッチェフの詩について О стихотворениях Ф. Тютчева」(1859) を発表している。フェートの主な詩論のひとつであるこの論文についてここで詳細を論じることはできないが，ピガリョフによれば，この論文は「革命的民主主義的批評がピークであったときに書かれ，『純粋な詩』の芸術的価値のあるべき姿としてフェートの関心をひいたチュッチェフの詩は，文学論争の武器のようになった」[22] という。そして，フェートの論文もまた詩「秋の夕べ」について言及し，しかもネクラーソフに変更されたままの最終2行に触れ，「無機質な世界の現象から人間の世界への速やかな移ろいを示すのではなく，生気あふれる秋の新しい色調なのだ」[23] と，イメージを自然から離すことを読者にあえて禁じているのは興味深い。ネクラーソフとフェートはプーシキン没後の空白期を通過した19世紀後半のロシア詩の，対立しながらも補い合うような大きな二つの流れの代表であり，チュッチェフの文学的な立場は，チュッチェフがフェートに共感して贈った詩「フェートへ A.A. Фету」(1861) も存在するように，ネクラーソフよりもフェートに近いと考えられてきた。しかし，今回考察したネクラーソフの論文の意図を考慮するならば，ネクラーソフとフェートはともに，チュッチェフを高く評価し，自身の詩風との近さを主張していた。チュッチェフは自身から何らかの文学流派に属することはなかったが，こうして19世紀中頃のロシア詩の通時的（プーシキン時代と1850-1860年代のロシア詩)，そして，共時的（ネクラーソフとフェート）な空白を埋めているのである。

（さかにわ　あつし・早稲田大学大学院）

注

1 *Мережковский Д.С.* В тихом омуте: Статьи и исследования разных лет. М.: Сов. писатель, 1991. С. 416.

2 *Королева Н.В.* Ф.И. Тютчев // История русской поэзии. Л.: Наука, 1969. Т. 2. С. 215. ネクラーソフの詩とチュッチェフの詩の自然描写の類似については，*Скатов Н.Н.* Некрасов: Современники и продолжатели. Очерки. М.: Сов. Россия, 1986. С. 147.

3 Там же. С. 142.

4 *Петрова И.В.* Мир, общество, человек в лирике Тютчева // Литературное наследство. М.: Наука, 1988. Т. 97-1. С. 30.

5 ネクラーソフの著作（およびその注釈）の引用は *Некрасов Н.А.* Полное собрание сочинений и писем.: в 15-ти т. Л.: Наука, 1981-. により，〔　〕内に巻数と頁数を記す。なお，翻訳は坂庭によるが，ネクラーソフの詩については，ネクラーソフ『恋と詩と最後の唄』大原恒一訳，邑書林，1995. を参照させていただいた。

6 *Пигарев К.П.* Судьба литературного наследства Ф.И. Тютчева // Литературное наследство. М.: Журнально-газетное объединение, 1935. Т. 19-21. С. 373.

7 *Манн Ю.В.* Верность, мягкость и разнообразие тонов (О Некрасове-критике) // Вопросы литературы. 1986. № 8. С. 138.

8 「ネクラーソフがチュッチェフの抒情詩を賞賛したのは哲学的内容や自己発見のためでなく，迫真の自然描写のためである」という指摘がある。*Zeldin J.* Poems and Political Letters of F.I.Tyutchev. Knoxville: The University of Tennessee Press, 1973. P. 8.

9 *Манн Ю.В.* Верность, мягкость и разнообразие тонов (О Некрасове-критике). С. 140.

10 *Кожинов В.В.* Тютчев. М.: Соратник, 1994. С. 349. なお，チュッチェフとネクラーソフはネクラーソフの論文以後にも実際にはほとんど接触がなかった。

11 「デニーシエヴァ・シリーズ」については，坂庭淳史「チュッチェフ『デニーシエヴァ・シリーズ』における合一の変奏」，『ロシア語ロシア文学研究』32 (2000)：17-28.もあわせて参照されたい。

12 *Кожинов В.В.* Тютчев. С. 351.

13 ここでは触れないが，他にも8行目の ясный が холодный に変更されている。この変更について，ピガリョフは「言葉があまりに奇抜であったため」(*Пигарев К.П.* Судьба литературного наследства Ф.И. Тютчева. С. 373.) としている。また7行目 предвестье близящихся бурь が предчувствие сходящих бурь に変更されている。チュッ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

チェフはこの変更を事前に知りえなかったが，変更に対して後に異を唱えることもなかった。彼は自分の作品の扱われ方にほとんど無関心であり，1854年の詩集でも編集者ツルゲーネフが独自の判断で詩行を変更している。

[14] *Горелов А.А.* Три судьбы. Л.: Сов. писатель, 1976. С. 63.

[15] *Николаев А.А.* К истории подготовки сборника стихотворений Ф.И. Тютчева (1854) изданного редакцией некрасовского «Современника» // Некрасовский сборник. Л.: Наука, 1983. Т. 8. С. 38.

[16] *Жирков Г.В.* История цензуры в России XIX-XX вв. М.: Аспект Пресс, 2001. С. 98.

[17] *Пигарев К.П.* Судьба литературного наследства Ф.И. Тютчева. С. 373.

[18] *Чуковский К.И.* Вступительная статья // *Некрасов Н. А.* Полное собрание сочинений.: в 3-х т. Л.: Сов. писатель, 1967. Т. 1. С. 26.

[19] *Баевский В.С.* История русской поэзии: 1730-1980. Компендиум. М.: Новая школа, 1996. С. 172.

[20] *Бухштаб Б.Я.* Вступительная статья // *Тютчев Ф.И.* Полное собрание стихотворений. Л.: Сов. писатель, 1957. С. 50.

[21] *Королева Н.В.* Ф.И. Тютчев. С. 192. この場合のリアリズムとは「感情描写」,「女性の形象の具体化」を意味している。

[22] *Пигарев К.П.* Жизнь и творчество Тютчева. М.: АН. СССР, 1962. С. 144.

[23] *Фет А.А.* Сочинения.: в 2-х т. М.: Худ. лит., 1982. Т. 2. С. 155.

Ацуси САКАНИВА

О статье Н. А. Некрасова «Русские второстепенные поэты»

(Ф. И. Тютчев в статье Некрасова)

В 1850-м году Н. А. Некрасов опубликовал статью «Русские второстепенные поэты» на страницах журнала «Современник». В этой статье он упоминал стихотворения Ф.И. Тютчева. Стихотворения Тютчева были помещены в пушкинском «Современнике» (1836-1840), но не нашли особого отклика, и были почти забыты. Эта статья, ставшая первой в России критикой стихотворений Тютчева, вывела его на сцену русской литературы.

Существует много разных исследований, посвященных Тютчеву и Некрасову, например, об их взаимоотношениях или сходстве, но почти все они касаются проблем, относящихся к периоду после 1850-го года. Статья «Русские второстепенные поэты» практически нигде не упоминается. Хотя именно в ней впервые пересеклись миры двух поэтов.

В своей статье я ставлю ворпос: «Почему Некрасов обратил свое внимание на Тютчева ?» и предлагаю свой вариант чтения некрасовской статьи.

На мой взгляд, в статье Некрасова есть два важных момента, которые до сих пор не были замечены. Во-первых, Некрасов упомянул о стихотворениях Ф.И. Тютчева после рассуждений о современной русской поэзии и других поэтах (Н.П. Огареве, И.С. Тургеневе и др.). Во-вторых, из всех стихов Тютчева Некрасова интересует больше всего стихотворение «Осенний вечер» (1830). Он произвольно заменил слово «божественный», которое хорошо отражает тютчевский пантеистический мир природы, словом «возвышенный», и дал этому стихотворению очень оригинальную трактовку. В результате этой замены несколько изменились акценты в стихотворений. Из тютчевской осенней природы он вывел образ молодой умирающей женщины. Мне трудно с этим согласиться. Этот образ встречается в стихотворений других поэтов, откуда Некрасов и позаимствовал его.

Учитывая строгую цензуру, не пропускавшую в печать произведения Некрасова, я сделал вывод, что в статье Некрасов имел намерение связать себя с современной поэзией, и в частности с Тютчевым, и потом через Тютчева связать себя с Пушкиным и поэзией 1830-ых годов. Чтобы подчеркнуть эту связь, Некрасову и понадовился образ молодой умирающей женщины.

В статье Некрасова, особенно в его трактовке стихотворения «Осенний вечер», пересекались различные направления и школы (романтизм, натуральная школа и реализм). Значит, 1850 год, когда Некрасов опубликовал статью, был поворотным в русской поэзии. Поэтому статья «Русские второстепенные поэты» занимает такое важное место в истории русской литературы.

NII-Electronic Library Service